

明治期の万世大路・ 大平宿 (福島県福島市)



by TUKA



HP「わが大滝の記録」より転載・加工

昭和9年（1934）に撮影された大平宿の貴重な写真。

廃村となって2年が経過した姿である。

意外と大きな建物が、道（言うまでもなく国道・万世大路である）の両側に並んでいる。

中央の人物の奥にトラック、その奥は木橋だった頃の**大平橋**だろうか。

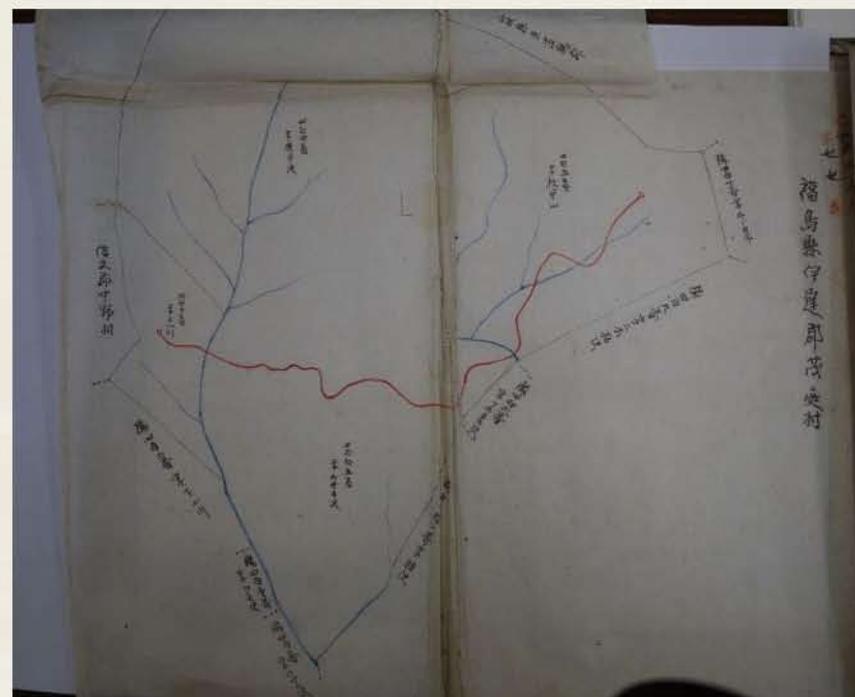
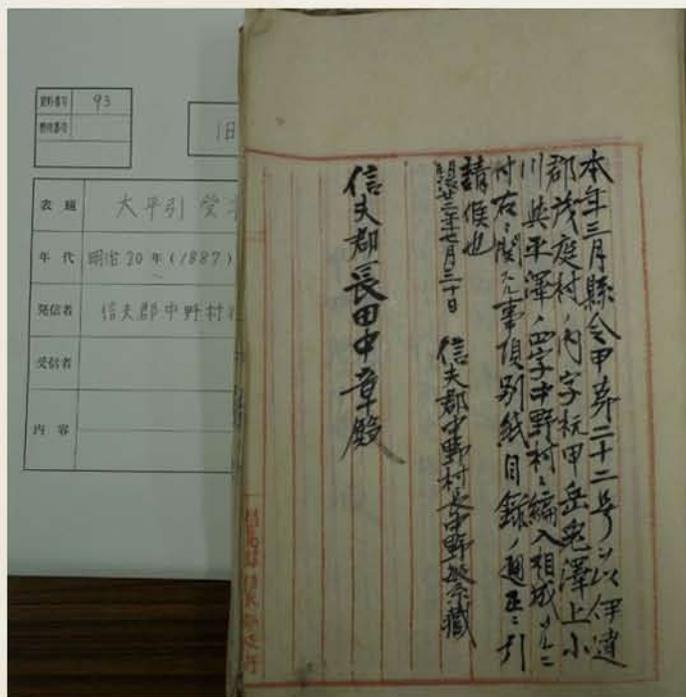
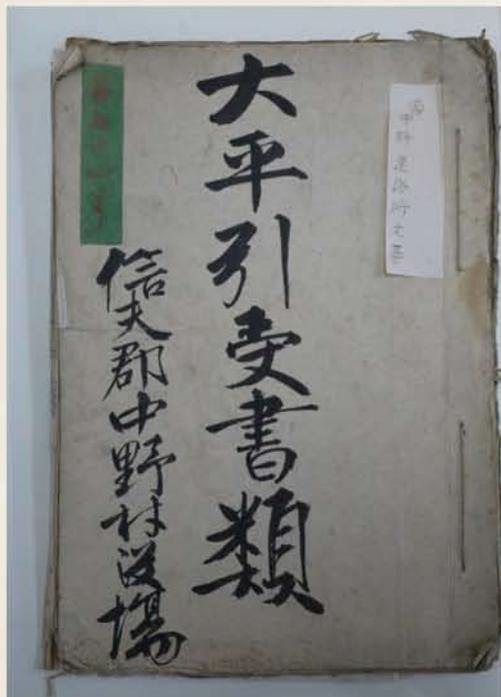
正面の山は、国土地理院図には名のない1202m峰であろう。

あの左の鞍部下を**栗子山隧道**が貫いている。

「大平引受書類」

明治22年

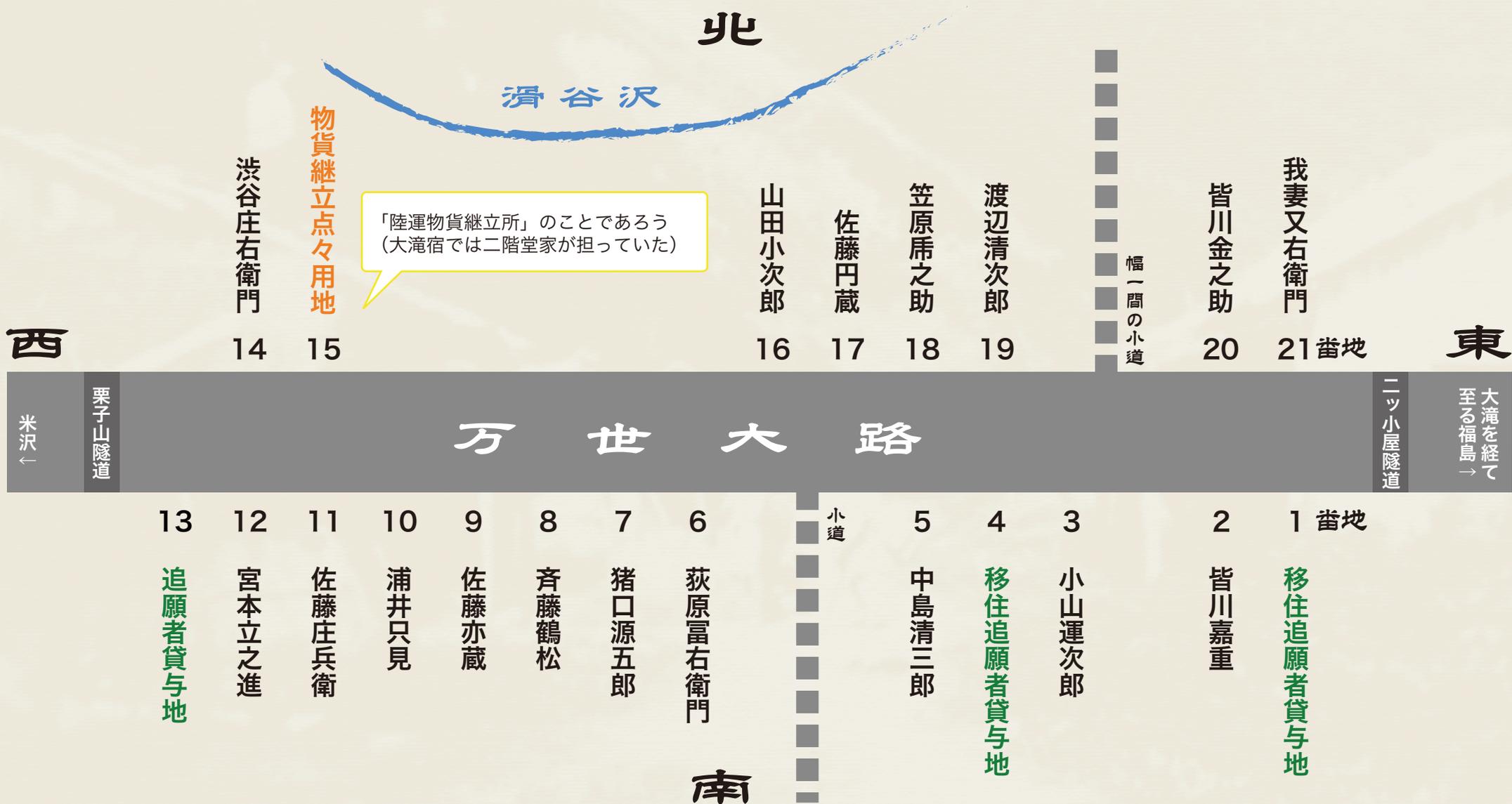
(「福島県歴史資料館」蔵 撮影：大滝会 渡辺文朝氏)



資料が非常に乏しく、ほとんど謎であった**大平宿**であるが、明治期の大滝宿の資料を探す過程で、大平宿に関する公文書が発掘された。今回、その貴重な資料を提供して頂くことができたので、解析してみた。

まず「**大平引受書類**」と題される古い公文書だが、これは明治22年（1889）4月の村制施行の際に大平宿を含む地域（杭甲岳・兔沢・上小川・与平沢の4地区）が茂庭村から中野村に編入されたことに伴い、中野村役場が作成し、中野繁蔵村長より信夫郡長・田中章に提出された文書と見られる。（田中章は三島通庸・福島県令が連れてきた元薩摩藩士）この書類は、編入エリアを示す略図の他、**大平宿の住人名簿、集落の平面図**などが含まれる、貴重なものであった。中でも「**宅地として貸与すべき地点 岩代國伊達郡茂庭村字大平ノ内杭甲山**」の項には、住所、面積、戸主名が列記されており、さらには地籍図も添付されているので、この2つを合わせることで当時の住宅地図を作成することができた。掲載は世帯主の住所氏名のみなので、残念ながら家族構成や職業・屋号などは分からない。旅籠や運送業を営んでいたとの記録は残っている。

以上の資料を元に、明治 22 年の大平宿住宅地図を作成してみた。



大平宿は明治14年（1881）に旧米沢藩の士族**20戸**が移住して開村した、と記録にあるが、それから8年後の明治22年に作成された「引受書類」によると、その時点で残っていたのは**17戸**と僅かに減少している。離村した3戸が住んでいた場所が、「移住追願者貸与地」とある1、4、13番地の3箇所なのであろうか。あるいは20戸が移住予定で宅地も用意されたが、実際に移住したのは17戸だった、という可能性もあるか。

さて、上記書類にて名前が判明したこの17戸は旧米沢藩士であると断定しても良いのだろうか。手元に（これもご提供頂いた）米沢藩庁が作成した全藩士の名簿である、「慶応元年分限帳」と「明治二年分限帳」があるので、上・中・下巻の全ページをめくって、ひとりひとり照らし合わせる、という超絶に地味な作業をちまちまと実施。その結果、元藩士であることがほぼ確実な住人は以下の8名であった。（年齢は数え年）

番地	氏名	明治2年時の肩書	左同 禄高	年齢	備考
3	小山運次郎	雷撃隊 二番隊	2 俵	24 歳	
6	萩原富右衛門	九番隊 御鉄砲足軽	1 人扶持 2 石	28 歳	「萩原」の誤読であろう
7	猪口源五郎	会所番 元御弓	1 人扶持 2 石	12 歳	父が早世したのか、まだ少年の家長である
9	佐藤亦蔵	十番隊 御鉄砲足軽	3 人扶持 2 石	17 歳	「安蔵」の誤読ではないか
10	浦井只見	外張番 五番隊 隊頭	200 石	46 歳	元は与板組で、慶応元年当時は 3 人扶持 7 石と少禄だった
11	佐藤庄兵衛	九番隊 御鉄砲足軽	1 人扶持 2 石	38 歳	萩原富右衛門と同じ隊である
12	宮本立之進	与板組 一番隊 半隊頭	50 石	30 歳	与板組とは 直江兼続 の旗本のこと。彼はその副隊長だった
17	佐藤円蔵	二之大隊 二番隊	1 人半扶持 3 石	32 歳	分限帳では「圓蔵」

この8名を除いた9名も、姓は分限帳に記載があるので、元藩士である可能性が高いと見ている。分限帳には名前の載らない、武家の次男・三男なのではなかろうか。まあ、希望的観測である。

これは米沢市立図書館のデジタルライブラリーにて公開されている、「嘉永二年分限帳」の表紙。「慶応」「明治」もほぼ同じ仕様なので、参考までに提示しておく。



さらに、昭和7年（1932）の廃村まで残っていた6名が旧米沢藩士かどうか検証してみよう。

我孫子富蔵	両「分限帳」にも「引受書類」にも我孫子姓はない	X
吾妻定	「慶応分限帳」に吾妻姓があるが、「明治分限帳」と「引受書類」にはない	△
笠原美雄	18番地に住んでいた帙之助の子孫だろうか	△
新保代次郎	「分限帳」には新保姓があるが「引受書類」にはない	△
羽賀運太郎	「分限帳」にも「引受書類」にも羽賀姓はない	X
佐藤好造	よくある姓なので断定は難しい。安蔵か円蔵か庄兵衛の子孫とも考えられる	△

というわけで、6名中4名に可能性を感じる程度で、断定するまでには至らなかった。

なお、初代移住者のリーダーではないかと考えていた**新保家**は「引受書類」に載っておらず、明治22年当時には住んでなかったことが判明。元藩士かどうかすら判然としない結果となった。

また、明治20年6月に作成された「**陸運物貨継立営業者規約**」には、「大平：**宮本立之進**代理 **浦井只見**」とある。（「福島町の町と村II」より）宮本家の向かいにある15番地にて、運送業を営んでいたのであろう。

この2名は両「分限帳」にも「引受書類」にも記載されており、与板組というエリート出身で、しかも比較的高禄であった。この2名が大平宿のリーダー格だったと思われるが、昭和の廃村を待たずに大平を離れている。

また、「**明治32年3月に大平分教場が廃止された**」との記述があった。（「福島町の町と村II」より）

大平には学校があったのだ。

場所は最も面積が広い13番地であろうか。設置年は不明だが、おそらく大滝と同じ頃（明治23年）であろう。

教師は学校に併設された宿舎にでも住み込んでいたか、それとも大滝辺りから通っていたのだろうか。

学校があったこの10年余りが最も繁栄した時期だと思われる。

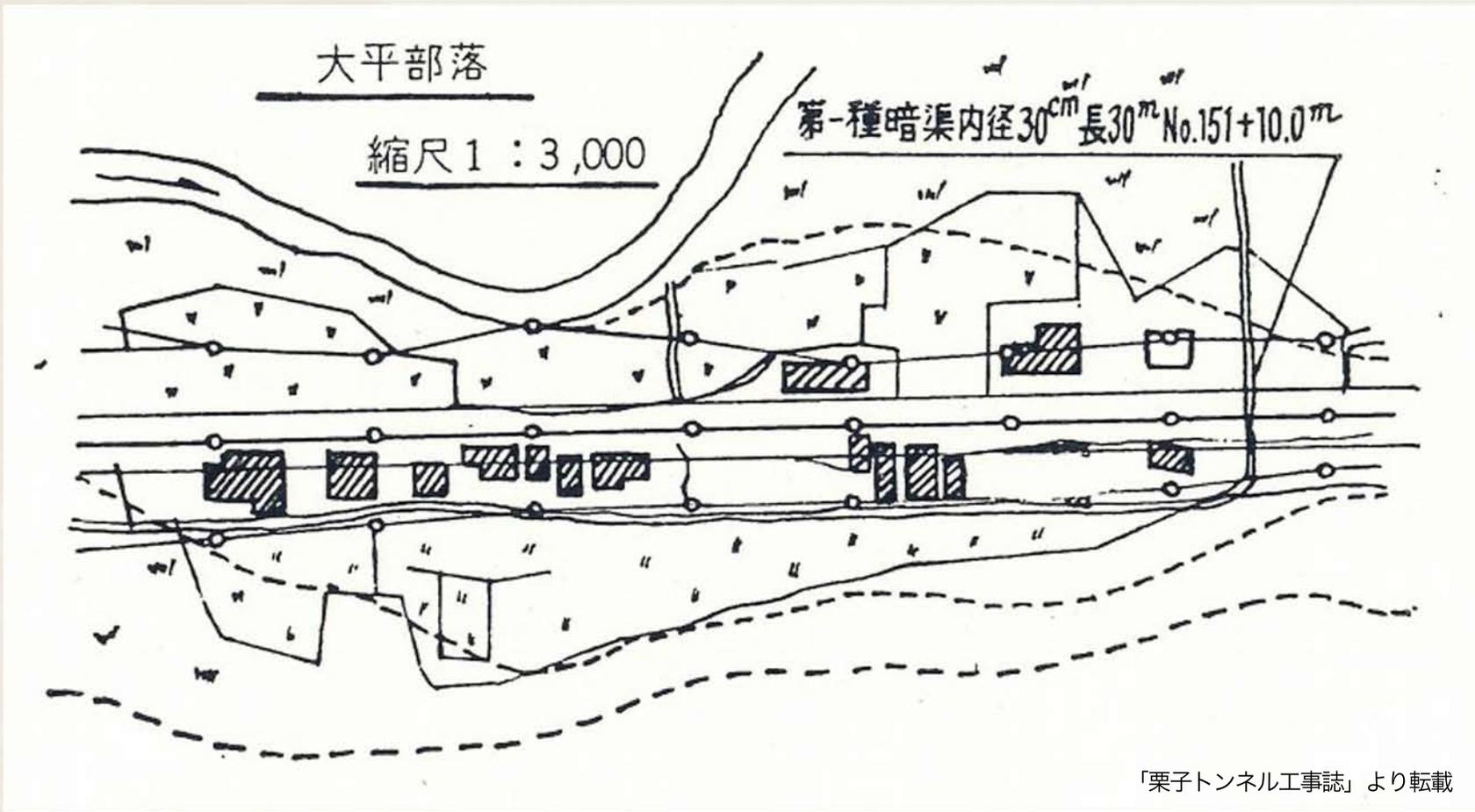
集落衰退の原因となる奥羽本線・福島～米沢間の開業も、同じ明治32年の5月のことであるが、すでに大平の人口減は始まっていたようである。

「分限帳」と「引受書類」の記述を合わせ、住宅地図に加筆、氏名の誤読を修正し、さらに年齢を追加してみた。

赤文字は旧米沢藩士であると確認できたものである。

「明治二年分限帳」では数えて12歳だった猪口少年が、32歳の壮年になっている。





これは昭和の大改修の際に作成された、大平の路線実測図である。

道路拡幅（盛土して路面を5m嵩上げ）により宅地が潰地となるため、昭和7年（1932）に残っていた6戸の退去が命ぜられ、全世帯が大滝に転居した。

世帯主は**我孫子富蔵**、**吾妻定**、**笠原美雄**、**新保代次郎**、**羽賀運太郎**、**佐藤好造**、である。

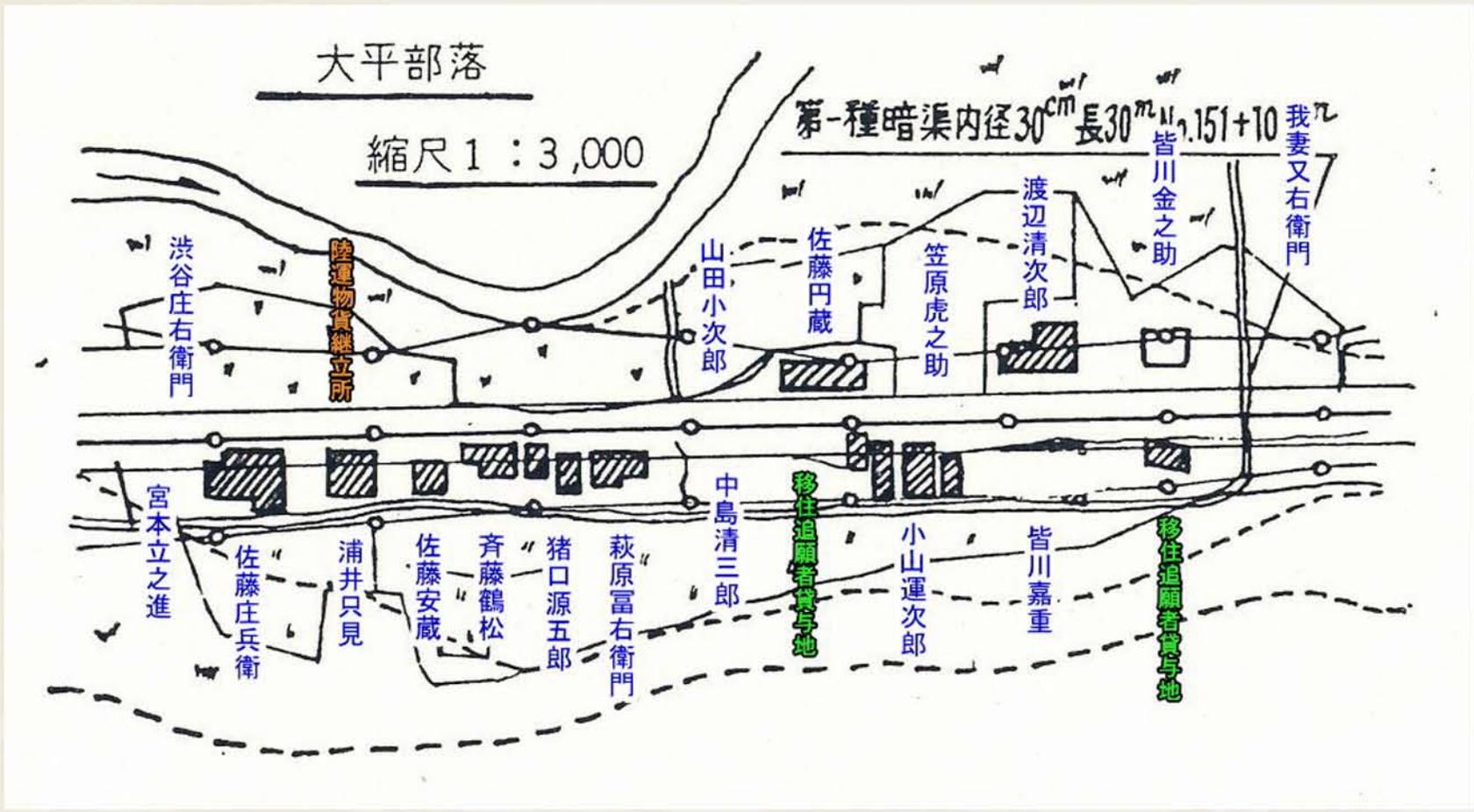
斜線が入られた四角は、当時現存していた住宅や倉庫、作業小屋だろうか。大小様々である。

国道南の西側一帯が暮らしやすかったのか、家屋の残存率が高いようだ。

栗子山隧道の改修工事は昭和9年（1934）春に着手されるのだが、現場の施設が整うまでは大平の廃屋を再利用していた。

民家4軒、炭小屋7軒を改修し、現地事務所や宿舎としていたとのこと。実測図を見ると、残っていた建物のほとんど全てを利用したようだ。

ここから1.2km離れた栗子山隧道の改修工事現場まで歩いて通っていた。



あまり意味のないお遊びであるが、明治の地籍図と昭和の実測図を、推測を交えつつ合わせてみた。

笠原家は既になく、空地になっていたようなので、

集落内での転居がなかったとすると、昭和7年に大滝に移住した**笠原美雄**は米沢藩士の子孫ではないことになる。

一方、**佐藤家**は3軒とも残っているので、**佐藤好造**は3家いずれかの子孫である可能性が考えられる。

佐藤好造の名は、大滝の**山神社**に現存する明治36年（1903）の銘がある**湯殿山碑**に見ることができる。

当時、大平に住んでいた彼は、大滝の人々と共に湯殿山に参拝し、その記念として石碑を神社に奉納したのであろう。

その彼も、昭和7年には笠原ら大平住民と共に大滝に移住することになるのだが、

笠原美雄は昭和30年代までに大滝を去り、**佐藤好造**も昭和51年までに転出している。

を 明治期の万世大路・大平宿 (福島県福島市)

この記事の感想をお聞かせください。

公式サイトアンケートのほか、下記フォームからお送りいただくこともできます。みなさまのご意見、お待ちしております！

(空欄でも結構です。内容は「日本の廃道」公式サイトや本誌で公開する場合があります。公開を希望されない場合は「公開不可」にチェックを。)

1. この記事はいかがでしたか？

←つまらない・役に立たない ふつう おもしろい・役に立つ→

1 2 3 4 5

2. コメントをどうぞ！

次号発行まで保留

公開不可